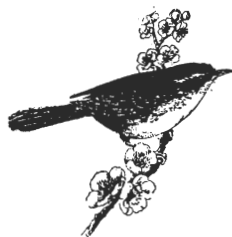


■支部だより■



北海道・東北支部のうごき

支部長 佐藤 哲

北は北海道から南は福島，新潟まで一道七県，それに札幌市を含む13機関が当北海道・東北支部である。

美しい自然に恵まれた支部管内も，一部地域では都市北の進展や企業の立地，あるいは各種の開発行為に伴って，公害による汚染が憂慮されている。住み良い，そして快適な北海道，東北を形成し，保持していくために，私たち13機関は互いに手を取り合ってきた。

さて，当支部管内各機関の業務内容には，それぞれ若干の相違がみられる。研究業務を主とする機関，測定調査業務を主とする機関，監視業務を主とする機関，また行政権限が付与されて，改善命令や苦情処理まで行っている機関など大変バラエティに富んでいる。機関の名称についても，すでにご案内と思うが，苫小牧公害防止センターが昭和55年4月1日付けで「苫小牧地方環境監視センター」に，秋田県公害技術センターが，本年4月1日付けで「秋田県環境技術センター」にそれぞれ改称された。

それでは，最近の支部活動状況についてご紹介しよう。

・支部総会

全国公害研協議会の総会が，毎年6月に開催されるので，支部総会はこれに先がけて例年5月中に開催している。

また，必要に応じて臨時総会も随時開催している。支部総会は，各機関持ち回りとなっており，昭和56年度は専森県公害調査事務所の担当によって，5月7日～8日，専森市において開催された。

各機関からの提案事項について，熱心な討議検討が行われたが，その中で新潟県から，「支部活動の強化策」について，次のような趣旨の提案があった。

すなわち，環境問題に類似点の多い当支部所属機関の策の連絡を一層緊密化し，支部活動を強化するには，具体的にどんな方策を講じれば良いだろうか，というものである。

この提案に対して，

(1) 小委員会や，担当職員で構成する連絡会議を設置

したらどうか。

(2) 担当職員を支部内の機関に派遣して，相互に研修を実施したらどうか。

(3) 支部機関紙を発行したらどうか。

(4) 支部の研究発表会で，研究発表のみでなく，意見交換の場を設けたらどうか。

(5) 支部機関に共通する研究テーマを選定して，共同で検討したらどうか。

(6) 環境庁の委託事業を，2～3の機関で共同受託し，共同研究を行うようにしたらどうか。

(7) 現在，年1回開催している支部幹事会の回数を増やして，情報交換，意見交換の機会を多くしたらどうか。

など，活発な意見が提出された。要は情報交換や意見交換，あるいは相互研修の機会をもっと多く持って，連携を強化していこうということに尽きたようである。

次いで，昭和56年度の研究テーマについて情報交換を行った。本年度の研究テーマは，13機関合計で62題となる。やはり，大気，水質関係のテーマが最も多く，大気関係では，雪国特有の共通課題であるスパイクタイヤによる道路粉じんや騒音振動の問題，稲わら焼却時における環境大気調査等当支部特有のテーマがとりあげられている。また，石炭火力との関連から，大気中水銀の相対濃度の研究も一部機関でとりあげている。

水質関係では，生活排水や富栄養化に関するテーマが多く，また土壌汚染関係では休廃止鉱山による重金属汚染の問題，悪臭については，官能試験による悪臭評価判定の問題をとりあげた機関がみられる。

この研究テーマに関連して，担当職員や予算について，また56年度環境庁委託事業の内容についてそれぞれ情報交換が行われた。

翌8日は，お城と桜とリンゴのまち弘前市を訪れ，弘前城や津軽家の菩提寺である長勝寺を参観させていただいた。もうすぐ満開になろうとしているリンゴの花につつまれた早春の津軽の野づらに，ひととき高くそびえ立

■支部だより■

つ津軽富士の秀峯を目の当りにしたときそれは息をのむほどの美しい一幅の絵となって、正に心の洗われる思いであった。

2. 支部研究連絡会議

昭和50年度から開始されたもので、56年度で第7回目になる。内容は各機関において実施した調査研究の発表と、会の運営、情報交換などを行うための幹事会である。

この研究連絡会議も、各機関持回りで、本年度は青森県公害センターが担当し、9月に八戸市において開催される予定である。

従前までは、それぞれの機関で実施した研究を、単に発表するだけに止まっていたが、これだけでは物足りないので、各機関がかかえている悩みや問題点についてお互いに話し合い、少しでも解決していこうということになり、53年度に仙台市において開催した第4回研究発表会から、各機関共通のテーマについて討論するパネルディスカッションを行っている。

参考までに、年度ごとの議題をご紹介します、53年度（仙台）

- ・公害行政の将来の展望と公害センターの役割り
- ・大気汚染常時監視システムに関する諸問題

54年度（福島）

- ・水質監視体制の現状と今後の課題
- ・環境影響評価の法制化に伴う地方公害研の役割り

55年度（新潟）

〔調査研究部門〕

- ・悪臭物質の測定法、・富栄養化と窒素、リンの分析法〔試験検査部門〕

- ・排ガス中の各種汚染物質の測定法、・COD測定法

となっている。

55年度の新潟のときには、

「これからの地方公害研のあり方——環境アセスメント、環境管理業務における公害研の役割り——」と題して、北海道公害防止研究所長左部勝氏及び宮城県公害規制課長幕田豊二郎氏による特別講演も行われた。

ところで研究発表であるが、56年度は前述のように未だ開催されていないので、55年度に、新潟市を会場として開催された分についてご紹介する。

演題は、

大気部門	5題	騒音部門	1題
水質・底質部門	9題	悪臭部門	1題
		合計	16題

であった。

この中で、新潟県公害研究所の田村良三氏が、「大気汚染と間違えられた一事例(ミツバチの悪戯)」と題して、大変面白い事例を発表している。これは、昭和51年春頃から新潟市内の一部地域に、原因不明の降下物質が多数降りそそぎ、周辺住民から工場による大気汚染ではないかという苦情が寄せられたことから始まった。

調査してみると、この降下物質は多少湿り気があり、5～10mm程度の黄～黄褐色の棒状あるいは球状態で、粘性性に富むため、駐車中の自動車や洗たく物を汚す原因となっていた——ということである。周辺工場を調査したが原因は見当らず、降下物を顕微鏡検査した結果、花粉の集合体であることが確認され、再度調査したところ、降下地域の近くに養蜂場があり、ミツバチが原因と判明した、ということである。そして、これらの排泄物は、ほぼ純粋な花粉塊であり、衛生的には問題はないにしても、住宅密集地における養蜂については、なんらかの対策が必要であると考えられる——と結んでいる。

実は、53年度に、仙台で開催された研究発表会において、当時の支部長であられた北海道の向後鉄太郎氏（現、全国公害研協議会顧問）が、「立派な研究成果よりも、むしろ失敗した事例を気軽に発表できるような雰囲気の方に育てたい。」と申されていたが、正にそのとおりで、このように比較的気づかれないような事例を、どしどし発表できるような会を希望するものである。

「ひかりは北へ、——首都圏と盛岡を結ぶ東北新幹線、同じく新潟を結ぶ上越新幹線は昭和57年度開業を目指して、今最後の仕上げを急いでいる。青函トンネルの工事も順調に進行している。6月26日には、新秋田空港が開港し、首都圏と秋田は1時間の距離に縮まった。

また、川口と青森を結ぶ延長約680kmの東北自動車道は、岩手県西根と青森県碓ヶ関間の約100kmを残すのみとなり、現在急ピッチで工事が進められている。

さらに、岩手県安代ジャンクションと八戸間も、一部区間ではすでに工事を開始しており、全面開通には未だ間があるが、北海道、東北にも新しい時代の波がひしひしと押し寄せている。

清らかな水の流れ、さわやかな青い空、静穏なたたずまい、緑濃い山野——このすばらしい北海道、東北の勝れた豊かな環境を保護保全するために、これからも一層努力していきたい。

おわりに昭和56年度からの支部役員として、支部長佐藤（宮城）、理事左部（北海道）、原子（青森）がそれぞれ選任された。よろしくご指導、ご鞭撻をお願いします。